

【小説部門・優秀賞】

虎の威を借る

白陵高等学校 第1学年 十倉 明日香

「なあなあ、お前何点？僕九十四やった」

「九十八」

「マジで！？やば」

「それ褒めてるの？」

「褒めとる褒めとる、マジやって！さっすが」

軽い感じで結果を尋ねるのも、笑顔を作るのも、もう慣れた。一人称を「僕」にするのも、関西弁にも、慣れた。

「やっぱすごいね。今回も一位やろ？」

「そうやで！こいつ、塾も行ってへんのやで！」

「なんであんたが誇らしげなんよー」

親友の結果を誇る台詞にも、慣れた。悔しさを隠すことにも、慣れてしまった。

でも、君に負けたときのこの感覚。喉が熱くなって細くなって、肺が重たく絞られるような感覚。これだけには、いつまで経っても慣れない。

いつまで経っても、慣れたくない。

「いやお前ほんまにすごいって、マジやばいよ。天才やで」

「うざ」

テストの帰り道はいつもこうだ。全く嬉しくなさそうな君をひたすら褒めまくって、全力でうざがられる。ここまでワンセット。こうやって、みじめな気持ちを振り払うまでがお決まりのパターン。

「逆になんで誇らんの？僕やったらもう、テスト用紙掲げて校内走り回るけどなー」

「目立ちたくないし、お前みたいなバカと一緒にされたくない」

心臓がきゅっと痛くなる。

俺は「バカ」。わかってる。わかってはいるけど、「バカ」という一言がこんなにも苦しい。意図して「バカ」を演じているくせに、君にだけは「バカ」にされたくない。

本当に、我ながら、「バカ」。どうしようもない「バカ」。

「バカはひどいやろ！？そりゃ、お前から見たら誰だってバカやろうけど」

軌道修正しようとして言った言葉が、ちょっとだけ、震えてしまった。

君には、どんな世界が見えているのかな。退屈で、簡単な世界かな。

—俺は、みじめに見えていないかな。

「なんだよそれ。俺が全人類見下してるみたいじゃん」

「え、違うん？」

「俺のことなんだと思ってんの？」

「天才！」

「.....バカ」

そう、君は「天才」。はなから勝てない。勝とうと思うこと自体が間違っている。

そんな君が俺は大嫌いで、そんな自分が、そんな「バカ」が、もっと嫌いだ。

「ちょっと、夕飯できたよ。いつまでスマホ見てるの」

鋭いノックの音がして、俺の返事を待たずにママが部屋の扉を開けた。

「待つてママ、クラスチャットがまだ切れてなくて」

「なに？大事な連絡？」

「いや、違うけど.....あいつが」

本当は違うけど、こう言えばママは怒らない。俺のママは、君のことが大好きだから。

ほら、もう笑った。

「心配なのね。あの子、馴染めてる？」

「.....あんまり。俺以外のヤツと喋らない」

「そう。いつでもうちに呼んでいいのよ。あの子は家族みたいなものだし」

胃が痛い。首筋が冷たくなる。君と家族じゃなくて、本当によかった。

「.....あいつ、最近、勉強がんばってるから。国公立行くって」

「さすがね。あんたも見習いなさいよ」

大きな空気のかたまりが、喉まで上がってくる。「俺も」って、「俺も二位だった」って、言いそうになったけど、同時に吐きそうだったからやめた。

ねえ、苦しいよ。気持ち悪いよ。毎日眠るのが辛いよ。お願い、俺を助けてよ。

お願いだから、消えてよ。

俺からママを奪った君のことが、俺は大嫌いで。そんな君に消えてほしいと願ってしまう最低な自分が、やっぱりもっと嫌いだ。

大きく息を吸って、吐く。隣から視線を感じた。もう一度吸って、止めて、扉を開ける。

「おっはよー！」

声は、震えなかったはずだ。たぶん。

「うわっ、朝から声デカっ」

「おはよ、今日小テストあるらしいで」

「マジ！？ やば、僕なんも準備してないんやけど」

本当は、知ってた。ちゃんと覚えてカレンダーに書いておいたし、徹夜で勉強もした。テスト本番でケアレスミスをやっつてのければ、バカなキャラと二位の維持は、意外と両立でき

る。

「なあなあ、勉強した？」

珍しいことに、今日は君に話しかける勇者が一人。君が振り返り、彼を見る。

「……」

無言。おまけに、眉間にしわ。

「……あはは、無視って」

勇者はちょっと乾いた声で呟いて、仲間の会話に戻っていった。

君は冷たい視線の中を大股で横切っていく。

ふと、頭になにかが浮かんだ。森の中で、猛獣の君が歩いている。たぶん虎だ。そんな君におそれをなして、弱い動物のみんなは逃げていく。そんな景色。

なんか、あれみたいだ。漢文の授業でやったところ。「虎の威を借る」。普段使う「虎の威を借る狐」とはかなり印象が違った覚えがある。あれの、動物が逃げていく一文。あの話を読んだから、こんなことを考えたのかもしれない。

でも、そうか、それならきっと、狐は俺だ。

バカみたいな空想をしている間に、君は席について、参考書を開いた。

退屈だけど全力で聞いておかなければならない授業が終わって、放課後になった。君はさっさと教室を出ていってしまうから、いつものように小走りで追いかけた。

「ちょっと、置いていかんとってよ」

「別に一緒に帰れとか頼んでない」

「僕が！一緒に！帰りたいの！」

部活に行く奴らとすれ違った。確かバスケ部の奴ら。先頭でだるそうに鞆袋を振り回しているあいつは、朝の勇者だ。

俺は部活には所属していない。君が帰宅部にするというから、合わせた。本当はちょっとバスケ部が気になっていたけど、見学にも行かなかった。

「なあ、今日の小テスト」

「ま・ん・て・ん。はい、満足？」

「ちょお、扱いが雑や！……まあええわ、やっぱさすが俺の親友やな！」

俺にとって、これより大事なことはない。「僕」を維持し、君のそばにいること。それだけできればいい。周りに合わせるのがちょっと苦手な君が、「僕」を必要としてくれるだけで、君に勝てない俺でも、君と対等でいられる。

だから君はそのままいい。ずっと「僕」という狐の後ろで、虎みたいに周りを睨みつけていればいい。

この気持ちはまさしく優越感だ。俺が君をバカにすることができる、唯一の理由だ。

「僕」と俺は違う。俺が君に勝てなくても、「僕」がその劣等感を塗りつぶしてくれる。「僕」と君は対等な親友で、「僕」は君が大好きだ。それでいい。

「ねえ、変わらないでね」

不意に、言葉が口をついて出た。

君は一瞬驚いたような顔をしてから、思っきり顔をしかめて、

「……うっざ」

心の底からバカにしたような声で、そう言った。

「なあ、お前うざいよ」

「……」

驚いて、何も言えなかった。

沈黙のすきに、少し居心地悪そうな声が矢継ぎ早に言葉をぶつけてくる。

「頭いいのにバカアピしてさ、イタいんよ。天才くん持ち上げてばっかできあ」

「……別に頭よくないで」

耳の奥がごうごうと鳴っている。うつむいて視界に入った胸がわかりやすく上下している。

うざい。うざい。うざい。うざい。うざい。

知ってる。俺が、一番知ってるよ。

「は？いつも二位のくせになに言っとんの？そういうところがうざいって話やん」

知ってる。だからどうすればいい？

「天才くんやって迷惑やろ。四六時中まとわりつかれてカワイソーやな」

知ってる。だからどうすればいいんだよ。

「お前、すぐしゃしゃり出てくるやん。あの子、いやーな顔しとるで」

知ってる。だからどうすればいいつつってんの。

「なんていうんやったっけ、えーと……。あ、そう、『虎の威を借る狐』」

「……」

息が、止まる。喉から変な音がした。

「……そやね。気いつけるわ」

それだけ言って、逃げた。

「虎の威を借る狐」。虎を後ろ盾にして威張る狐。この故事成語は一般的に、狐にあたる人を皮肉る意図で使われる。

狐は立派な虎を利用して、周りの動物たちが逃げるさまを見て得意になる。自分が虎のように強くなったと錯覚し、己の小ささを忘れてふんぞり返る。

虎の力によって、仮初めではりぼての力を手に入れた狐。——彼は、悔しくなかったのだろうか。

虎の強さを思い知るたび、自分と比べ、つらい思いをしなかつただろうか。

強者に助けられるみじめさに吐きそうになったことも、なかつたのだろうか。——なかつたのだろう。「虎の威を借る狐」は、そういう言葉だ。

なら、俺は狐になりたい。

なにも考えず、君の威光を借りて、笑っていたい。

君と、俺を、好きになれるように。

今日は英単語テストだった。結果はボロボロ……に、した。いつも通りの帰り道、いつものように、君に問いかけただけだった。なあ、何点だった？やっぱり満点？それだけだ。いつもと変わらない、何気ない言葉だった。

なのに。

「なあ、お前、もうやめろよ」

「……なに？」

見上げた君の顔がいつになく歪んでいて、少し変だなと思った瞬間だった。

「だから、そうやって俺を持ち上げんの、やめろって言ってんだよ！！」

裏返った、情けない声。でもとても大きな声。そのまままくしたてられた言葉が、ぼうっとした脳をすり抜けていく。

「もう嫌なんだよ！！お前がいつもそうやって、俺のこと天才だっていうから！だから、だから俺がんばらなきゃいけないくて、勉強ばっかして、友達もいなくて、全部お前のせいなのにさあ、お前、なんで一人だけ楽しそうにしてんだよ！！」

ああ、今、やっと、君のことがわかった気がする。

「お前、昔はそんなことなかつたじゃん！僕なんて言わなかつたし、関西弁じゃなかつたのに、なんかいつのまにかキャラ変わってて、もうわかんないよ、お前、なに考えてんの」

今泣いている君は、君が俺に見せていた「君」じゃない。俺にとっての「僕」みたいに。「俺さ、もうやだよ、勉強したくないよ。俺はこんなに必死なのに、お前は簡単に二位取るし、俺のこと褒めてばっかで自分の結果誇らないし、俺、なんか、自分がバカみたいで」

「……うん」

「お前のこと嫌いになりたくないのに、俺、お前が大嫌いなんだ」

君にとって、虎は俺だった。そして君は狐で、俺の威を借りて、みじめな思いをしていた。

俺と同じように。

「なあ、辛いんだよ。毎日しんどいよ。助けてくれよ。もう俺、どうしたらいいのかわかんない」

俺たちは同じだった。狐であり、虎だった。

「天才じゃない俺なんて、お前は嫌いだろ……？」

自然と口角が上がる。

「大丈夫だよ。大好きだから」

「……嘘だ」

「嘘じゃない。だってさ」

——結局俺たち、虎の威を借る狐だったんだよ。

故事成語、「虎の威を借る狐」のもととなった故事では、狐は虎に食われかけ、危機を脱するために虎を騙す。

虎は狐の味方ではない。狐は、生きるために虎の威を借りた。

自分に背を向け逃げていく動物たちを見た狐は、きっととても、みじめな気持ちであっただろう。